

成医会講習所の設立と福沢諭吉

1880年、5年間の英国留学を終えて帰国した高木兼寛（1849-1920）は、その翌1881年、松山棟庵（福沢諭吉の高弟、1838-1919）とともに成医会講習所なる英国式医育機関を設立している。松山は帰国早々の高木を訪ね、英国流医学を基調とした医学校の設立を盛んにすすめたのであった。この松山の熱心な誘いは、当時の医学教育が極端にドイツ流の研究機関的色彩が強かったせいではあるが、彼の背後に福沢諭吉（1834-1901）がおり、福沢の意向が相当入っていたことも否定できない。福沢と松山は、すでに成医会講習所設立の8年前（1873）に慶応義塾の中に、同じ思想で慶応義塾医学所を設立しているが、この医学所は、約300名の卒業生を送りだしただけで、経済的破綻からわずか7年の寿命で廃校のやむなきにいたっている。おそらく、福沢は彼好みの「人間普通日用に近き実学」（学問のすすめ）を基調とする医学校を創ってみたかったのではなかろうか。

福沢の僚友・手塚律蔵

さて、ここで問題にしたいのは福沢と高木との関係である。福沢はどのようなルートで高木を知り、そして彼を高く評価していたのであろうか。少し独断めくが、筆者の推測では、それは高木の岳父・手塚律蔵*（1823-1878）を通じてではなかったかと思うのである。手塚が福沢の親しい友人であったことは、福沢が自ら「福翁自伝」の中に書いている通りである。その中に手塚は二度登場してくる。少し長いが、興味深い点であるので、その個所を引用

* のちに瀬脇寿人と改名するが、紛らわしいのでここでは最後まで手塚律蔵で通す。



手塚律蔵

(1823-1878, 後に瀬脇寿人と改名) この肖像は明治一桁の、年齢にして40代のものではないかと思われる。この時代にしては、ボータイ(蝶ネクタイ)に金鎖といった伊達姿は大変めずらしいものである。さすがに村田蔵六(大村益次郎)などと一語に維新運動に奔走しただろうことがほうふつと浮かんでくる。にもかかわらず、どうした訳か、以後維新史、明治史の表舞台からは次第に姿を消していくのである。晩年、ウラチオの任地に赴いた頃、長崎時代の友人寺島宗則は外務卿(大臣)として活躍中であり、彼の門弟神田孝平は兵庫県令(知事)として、同じく門弟西周もまた政府の高官としてときめいている。後輩福沢諭吉にいたっては今や文化人の重鎮として燦然と輝いている。それにひきかえ、齢五十半ばにしてなお異郷の地に赴き、その地で病を得て、いま世を去ろうとしている、彼の胸中を去来するものは果たしてなんであったか(彼が函館で客死したのは高木兼寛の英国留学中であった)。とにかく、わが国文化史上きわめて注目すべき又興味深い人物の一人であることは間違いない。

してみたい。

まずその「攘夷論」というところでは、“すでに私どもと同様、幕府に雇われている翻訳方の中に手塚律蔵という人があって、その男が長州の江戸屋敷に行って何か外国の話をしたら、屋敷の若者らが斬ってしまうというので、手塚はドンドン駆け出す、若者らは刀を抜いて追っかける、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃げきれずに、寒い時だが日比谷外の濠の中へ飛び込んでようやく助かったこともある。それから同じ長州の藩士で東条礼蔵という人もやはり私と同僚翻訳方で、小石川のもと蜀山人の住居という家に住んでいた。ところがその家いわゆる浮浪の徒が暴れ込んで、東条は裏口から逃げ出してやって助かったというようなわけで、いよいよ洋学者の身がはなはだ危なくなってきて油断がならぬ”。

もう一個所の「暗殺の心配」という条では、“万延元年(1860)井伊大老の事変後は世上なんとなく殺気を催して、手塚律蔵、東条礼蔵は洋学者なるがゆえにとて長州人に襲撃せられ、塙二郎は国学者として不臣なりとて何者かに首を斬られ、江戸市中の唐物屋は外国品を売買して国の損害するとて苦しめらるるというような風潮になってきました。これがすなわち尊王攘夷のはじまりで、幕府が王室に対する法は多年來にも相変わることはなけれども、京都のご趣

意は攘夷一点張りであるのに、しかるに幕府の攘夷論はとかく因循姑息に流れてちががあかぬ、すなわち京都のご趣意にそむくものである、尊皇の大義をわきまえぬものである、外国人にこびるものである、とこういえば、その次には洋学者を売国奴というのも無理はない。サア洋学者もこわくなってきた。ことに私などは同僚親友の手塚、東条兩人まで侵されたというのであるから、こわがらずにはいられない。”と書かれている(アンダーラインは筆者)。

この二つの文章はいずれも手塚律蔵にかかわる一つの事件をあつかったものであるが、福沢が二度までこの事件を引き合いに出しているところをみると、彼にとってこの“僚友”手塚律蔵の事件が極めてインプレッシブなものであったことがよく分かるのである。

ここで簡単に手塚律蔵のことを紹介しておく。よく知られるように彼は幕末の優れた洋学者、開国主義者の一人である。長州に医者の子として生まれ(1823)、はじめ長崎でシーボルトに学んだが、のち江戸に上って英学、物理、化学を修め一家をなした。安政3年(1856)幕府が蕃書調所(後述)を開設するにあたって、真っ先に教授方選ばれ、授業、翻訳に従事している。彼の語学力は抜群であつたらしく、多くの著述や翻訳などを発表し、蘭英学者として著名であつた。ある時、長州藩の江戸藩邸で兵事、造船などについて洋学を鼓吹したところ、これが尊攘志士の忌むところとなり、文久2年(1862)12月28日夜、藩邸より帰るところを襲われた(このときの状況は福沢が「自伝」に書いている通りである)。手塚は後難を恐れて佐倉に潜み、姓名も次々と変え、晩年には瀬脇寿人と改めた。維新政府になってからは再び(1869)江戸(東京に改まる)本郷に出て家塾を開くとともに、翌1870年からは外務省で翻訳の仕事をしている。彼はまた大陸発展に関心があつたらしく、これを政府に献策し、明治9年(1876)からウラヂオ貿易事務官に任ぜられている。毎年4月-10月を同地に滞在、事務を執っていたが、明治11年11月、病を得て帰国する途中、函館において客死した(年56歳であつた)。彼の著書、紀行、翻訳書の中には、「清英字典」、「蘭英文典」などの語学に関するものも多い。

高木の岳父・手塚律蔵

手塚が高木兼寛を知ったのは、彼の長女・富と高木が結婚してからであろう。明治5年(1872)6月に式を挙げている。高木24歳、富19歳、手塚50歳であった。仲人は高木の師であり、終生親父がわりとして面倒をみた石神良策(1821-1875)であった。石神と手塚とはすでに長崎遊学時代からの友人であったが、石神はその時海軍軍医部の最高実力者になっていた。石神は高木の将来にすべてを賭けていたような人であったから、高木がいかに優れた将来性ある若者であるかを手塚に逐一話していたに違いない。高木は明治8年(1875)6月、英国留学のため日本をはなれているから、岳父として手塚に接したのはそんなに長い期間ではなかった。

高木が日本を出立するとき、彼ら夫婦にはすでに二人の子供(長女・幸(1年10ヵ月)、長男・喜寛(7ヵ月))があったので、留学中は妻・富とともに手塚家に面倒をみてもらうことになっていた。しかし、このことは手塚家にとっても律蔵にとっても可愛い孫との生活であり、却って楽しい一時期になったのではないかと思われる。

このようなこともあって、手塚は旧友・福沢に会うときはいつも娘婿・高木のことを話題にし、現在英国のセント・トーマス病院医学校で医学を勉強中であること、何時頃帰国し、どんな計画をもっているか、などについて詳しく話していたのではないだろうか。そこは情報通の福沢のことである、記憶に留め、高木が帰国したと聞かや、直ちに弟子であり同志である松山棟庵を差し向け、医学校の設立を熱心に勧めたのではないかと思うのである(この時、彼らのつくった慶応義塾医学所の失敗した原因についても詳しく説明したことであろう)。

福沢と手塚が「僚友」関係にあったことは「福翁自伝」にみる通りであるが、ではどのようなきっかけでそのような関係になったのかとなると、史料が乏しく、あまりはっきりしたことは分らない。しかし、筆者のみるかぎりでは、それは恐らく福沢が専門を蘭学から英学に切り替えた件と関係がありそうに思えるのである。以下そのことについて簡単に説明してみたい。

福沢は安政元年(1854)頃から長崎や大阪(緒方洪庵塾、適塾)で極めて熱心に蘭学を学んでいる(手塚の長崎遊学はせいぜい1850年までであるから、この時期に福沢が手塚と知り合う可能性はない)。当時、福沢のオランダ語の実力は相当のものであったらしく、藩主から以後江戸で蘭学塾を開くよう命ぜられたほどである。彼はこの命に従って安政5年(1858)築地鉄砲洲に蘭学塾をひらいている(福沢塾ともいい、これが慶応義塾のはじまりである)。ところが、この時期彼は蘭学から英学へ転向せざるをえないような、個人的ではあるが極めて重大な出来事に遭遇するのである。福沢の言葉(「福翁自伝」)を借りながら、この出来事をながめてみたい。

蕃書調所(幕府洋学校)*

福沢が蘭学塾をひらいた翌年、安政6年(1859)頃は、横浜にもようやく港らしい雰囲気立ちこめ、“掘建小屋みたような家が諸方にチョイチョイできて、外国人がそこに住まって店を出している”といった状況であったらしい。そこで福沢はかねて腕に覚えのあるオランダ語が果たしてどの程度実用に耐えうるものか、“ものは試し”とて、一日、横浜見物に出かけ、オランダ語で話してみても驚くのである。

“ところが、ちょうとも言葉が通じない。こっちのいうことも分からなければ、あっちのいうことももちろん分からない。店の看板を読めなければ、ピンの貼紙も分からぬ、何を見ても私の知っている文字というものはない。英語だか仏語だかいつこう分からない。居留地をブラブラ歩くうちに、ドイツ人でキニッフルという商人の店におちあたった。その商人はドイツ人でこそあれ蘭語蘭文が分かる。こっちの言葉はロクに分らないけれども、蘭文で書けばどうにか意味が通ずるといので、ソコでいろいろ話をしたり、ちょいと買い物をしたりして江戸に帰ってきた。”

せっかく苦心惨胆して修得したオランダ語が外国人に全く通じないのを

* 幕末における西洋文化移植の中心、各藩からすぐれた洋学者を集めたため、全日本アカデミーの感があった。維新後「明六社」、「東京学士会院」に発展する。

知った福沢は奈落の底へ落とされた思いをするのである。“けれども決して落胆してられる場合ではない。あすこに行われている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。ところで今世界に英語の普通に行われているということは、かねて知っている。なんでもあれは英語に違いない”と思った。今後は英語を知らなければ洋学者としてはお話にならないと考えた福沢は、横浜から帰った翌日、気を取り直して英語を学ぼうと決心するのである（このあたり福沢の「実用性と合理性を貴ぶ学問観」が如実にみられて興味深い。これは高木の学問観でもある）。ところが英語を学ぼうにも、どこで誰に学んでよいのか、さっぱり分からない。

字書があれば何とかなると考えた福沢は、九段下の蕃書調所（その頃、手塚律蔵は英学者としてそこに勤務している）に英蘭対訳の字書があることを聞きつけ、“どうにかしてその字書を借りたいものだ”と奔走するのである。そして“借りるには調所に入門しなければならぬ、けれども藩士がだしぬけに幕府の調所に入門したいといっても許すものではない、藩士の入門願にはその藩の留守居というものが願書に奥印をして、しかるのちに入門を許すという。それから藩の留守居のところに行って奥印のことを頼み、私は袴（カミシモ）を着て蕃書調所に行って入門を願うた”といった具合に随分苦労をして、やっと借りられることになったのであるが、さていよいよ“英蘭対訳の字書を手にとり、通学生のいる部屋に行ってそこでしばらく見て、それから懐中の風呂敷を出してその字書を包んで帰ろうとすると、ソレはならぬ、ここで見るならば許して苦しくないが、家に持ち帰ることはできませぬと、係の者がいう、こりゃ仕方がない、鉄砲洲から九段下まで毎日引き引きに行くということはとても間に合わぬ話だ”ということで結局無駄になってしまった。

こうして福沢の蕃書調所訪問は、期待し奔走した割にはあまりぱっとしなかったが、しかし見方を変えれば（随分長い前書になってしまったが）、少なくとも（調所に勤務していた）蘭英学者・手塚と知り合う動機には十分だったと思うのである。

とにかく、この福沢の横浜見物、蕃書調所入門を動機にした蘭学から英学

への転向は、その後におこる英語系医学(慶応義塾医学所, 成医会講習所)の開設に必須の事件だったと思うのである。

福沢の語学的才能はよほど優れていたらしく、その後数カ月の独学で、翌万延元年(1860) 1月にはアメリカへ、文久2年(1862) 1月にはヨーロッパへ使節として渡航している。アメリカから帰って(1860, 5月)からは、福沢も蕃書調所に翻訳方として雇われることになったので、手塚との付き合いはさらに濃密になっていったであろう。手塚との交友関係は、おそらく手塚が明治11年(1878, 高木の帰国2年前) 函館で客死するまで、約20年間続いたものと思われる。

参考図書

- 1) 福沢諭吉: 福翁自伝, 潮出版社, 東京, 1971.
- 2) 大久保利謙: 明治の思想と文化. 吉川弘文館, 東京, 1988.
- 3) 東京慈恵医科大学創立八十五年記念事業委員会: 高木兼寛伝. 1965.